

---

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	① 1932年(男)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	①元漁民、年金生活者
補助調査者	なし		

---

#### 被調査者(主な聞き書きは話者①から)

\*話者② 1940年(男)、話者①の友人、元区長

#### 十八成浜で調査をおこなった理由

石巻市牡鹿町新山浜調査に関連して、その実態の理解をふかめるためには、牡鹿の隣接する地区についても比較を加えて全体像を理解する必要がある。特に地区間は住民同士の往来が多く、相互に関係しあっているからである。今回は、5月3日に十八成浜で白山神社の祭りが開催される事を新山浜で聞いたため、比較のための資料収集として調査を行った。この時には祭りの調査で終わったため、そこで知りあった祭りの参加者と後日(5月17日に)面談をすることで約束をした。それを受けての調査である。

#### 話者①について

昭和7年12月に十八成で生まれる。鮎川で小学校＝国民学校に通う。6年生で仙台に移動。5年間暮らす。学校に通うため。仙台では下宿していた。工業学校に行った。おやじが言うには当時は兵役がある。軍隊にいても工学を学んでいれば最前線にいかなくいい、それで技術を学べということだった。本当は行きたくなかったが、行った。そこで終戦を迎える。学校を終えて、十八成にもどってきた。実家はクジラの加工をやっていた。この商売について最初は自分たちのような個人でもやれたが、そのうちにすべて捕鯨会社に取り仕切られるようになった。それでその後は漁師となった。定置網をやる。定置網をしている時に、チリ地震津波を体験した。その時は、夜でカツオの餌用のイワシのいけすをみるために、沖合いにとまっていた。そうしたら津波がきた。夜が明けた頃、船のシートに水が当たる。風も吹いていないのにおかしいと思い外に見に行く。すると津波がきて、浮きもっていかれて船も引き込まれそうになる。それで浮きのついているヒモを切れといった。それで生き延びた。漁師はかならず手元に金物を置いておく。いざというときに切る事ができるように。包丁などを置く。

それ以来4回津波は体験した。今回が4回目。漁師としてやってきてきたが、ここにいると人は稼ぎの良い方に移っていく。働く人が足りないこともあった。また以前は巻き網をやっていて、田代地区、網地地区などに網元があった。自分はチサキ(地先)の漁師でいわゆる自営。自分のできる範囲内でやっていた。今は年金暮らしで、奥さん(網地島出身)と娘さんの3人で暮らしている。

#### 話者②について

昭和15年9月十八成生まれ。小学校と中学校は十八成だった。学校を出た後、鉄鋼関係で2年ほど働いた。その後帰ってきたウチをついだ。おじが役場(水道課)で働いていたが、自分も役場で働く。それで定年を迎えた。以前区長をやったこともある(この話者の家は代々区長をしているとのこと)。父は捕鯨会社で働いていた大工だった。会社に雇用された大工。以前クジラを解体する時には板張りの床をつくっておこなった。だから常に大工が必要だった。奥さんは網地島出身。結婚し、現在は奥さんと次男の三人でくらしている。クジラと縁がなくなるのはガクッとくる。シロナガスを取ると、その肉は300頭分の牛に相当した。また昔はマッコウ(クジラ)がよくあがっ

た。子どものころ、クジラのアブラ取るのをやった。皮はイリカワというが、シジル=炒めた後シズカスというカスができる。会社の人か昼の時にいなくなるので、かっぱらってきてよく食べた。すごくうまいがすごいアブラ。それで排便するとアブラまみれのものがでるくらいだった。十八成に暮らしている人でクジラと関係ない人はいないという。

### クジラの加工屋

話者①の実家はクジラの加工屋だった。クジラから肥料もつくった。クジラの仕事がやすみになるとイワシからアブラをとってカスづくりをおこなった。クジラの加工について。骨を蒸して、アブラを抜いて、アブラをとった。また骨は石臼で潰して骨粉をつくり、それを肥料として出荷した。蒸した後、ドブドブになったクジラの臓腑のなかにはいって、腸を食べると美味しかった。腸はひっくり返して内側を食べた。クジラに関しては、いくつか名称がある。クジラベーコンはウネという。シャチのことはタカマツ、マッコウはマッコウ、シロナガスはナガスと呼んだ。

### 十八成浜について

話者①によれば、震災前は100軒以上の家があった。300人ぐらいはすんでいただろうか。地震の被害はあったが、津波被害が少なく現在も暮らしているのは18軒程である。それ以外は流された。先祖から、ここは津波が来ないという言い伝えがあったのだが。朝日新聞社の御影石による津波被災の石碑が公民館にあった。あれは各部落にあった。震災前には、部落の中には班があった。それで白山神社の祭りを担当した。3つの班があった。その後人が少なくなり、2つの班となり、現在は全員で祭りの準備をする。ここの部落に契約講はなかった。自分が若い頃にもなかった。

話者②によれば、震災前は120軒家があった。このうち流されなかったのは18軒で、残りは仮設住宅にくらしている。外に出ていった人もいる。鮎川小、鮎川中、オオワラシ、ホットマル（セイユウカン）にそれぞれ仮設住宅がある。

### 十八成浜の漁業

以前は多くの人が北洋などにも雇用されていた。北洋がダメになった後は、スタントロールが石巻であり、スケソウダラやギンダラをとっていた。現在の石巻の漁業の問題は、このスタントロールがなくなったことで、それで働く場所がなくなったことだ。若い漁師に働く場所がないとみんなどこかへいくしかない。それを解決することが必要だという。十八成の場合ほとんどの人は、捕鯨会社で働いている。むかし南氷洋にいてクジラをとっていた人はいい年金をもらっている。悠々と生活している。自分のような地先漁師は数はすくないし、年金もすくない。

### 白山神社の由来

加賀の国が由来だとおもうが、よくわからない。ご神体は鏡だと思う。金華山の神社が鏡だから。話者①が役員だった昭和24、25年ごろだが、お祭りには三種の神器をそろえた。ツルギ・マガタマ・カガミである。榊をつけて、神輿の後に続いて町を練り歩いた。いつの間にかやらなくなった。

白山神社の祭りは、むかし八キダメまつりともいった。この意味は箒で掃いて寄せること。ここの地区には白山神社以外に、神明神社がある。もう一つはお稲荷様（稲荷神社）がコザワの方にある。本当は別々に祭りをやるべきだが、一つにまとめてしか祭りができなかった。十八成はむかしは地先（チサキ）の漁だった。むかしはマグロとかブリなどの大きい魚も地先で捕れた。巻き網でとるようになってから浜にはこなくなった。それでとれなくなったから、浜ではとれるものがないということでケツアライ浜というような別名もあった。とは言えまったく捕れないのではなく、イワシやタイ、スズキなどはいた。

### 昔の十八成浜の白山神社の祭り

昔の神輿担ぎは8人だった。それに1人のシオマキがいた。神輿の大きさも小さかった。現在お祭りは5月3



写真1 十八成浜公民館から町跡と浜



写真2 十八成浜白山神社正面

日にやっているが、話者①が覚えている範囲では旧暦で2月11日だった。その後話者①が小学校の低学年頃が終わった頃は、4月11日にかわった。それからしばらくこの日でやっていたが、10年ぐらい前かな、もっと前から、覚えていないが現在の5月3日にかわった。憲法発布の日ならいいだろうとなった。前の宮司が神社庁に連絡して許可をとった。

昔の神輿は今のより小さかった。新品ではなかった。網地島（あじしま）で神輿を作り替えることになり、それでいらなくなったのを譲ってもらった。自分が知る限り、神輿はこの網地島由来のもの、その後もうひとつあり、今の神輿は三台目である。なぜ網地島が神輿をあたらしくつくることになったかということ、その頃網地で大漁があったので、神輿を大きくしようということになった。それで余ったのを十八成に譲るということになった。そういう時に金をだすのが漁師気質（かたぎ）である。古くなった神輿は宮司がお払いして、清めた後その後は焼いていたと思う。

#### 祭りの準備

白山神社の祭りの前の日にはもちつきが行われ、神輿の準備賀行われた。滞りのないようにやる。町のなかの飾り付けなどもやっていた。

震災前のお祭りには演芸会がついていた。以前は宵祭りの時に、演芸会をやっていたが、若い人がいなくなってやる人が減った。また飽きてきた。それでプロを頼むようになった。それで再度飽きてきたので、自分たちでやるようになった。人口がすくなくなってきた。

5月には演芸会はユイマツリ（宵祭り）の時にやっていた。夜7、8時ぐらいから10時半ぐらいまで。村の人が皆集まり楽しんだ。演芸会では酒は出さなかったが、その場で飲んでもよかった。数年前までは民謡や劇団などプロを頼んでいたが、ここ最近では自分たちでやるようにしていた。その経費はもったいないということで、地区住民で相談して自前でやるようになった。地元の若い人がやるということでご祝儀も弾む。どのような演芸かといえば、やくざおどりのようなものだ。それをこの公民館でやる。神主も来てきた。

この演芸会の後、神輿を担ぐ人が神社にこもった。これをオコモリという。泊まるのは神輿のカツギテのみ。彼らは普段着できて夜は飲んで、朝着替えて白衣装を着る。神輿を担ぐのは現在は16人。このうち一人がシオマキ（塩をまいて神輿を先導する役）。

#### 青年団とカツギテ

昔は十八成にも青年団があった。ここでは男女双方がはいていた。学校を出たら入っていた。長男だけというのはない。農村はそのような慣習があるが、ここ（漁村）では長男を代表にするという仕組みではなかった。この青年団が主体となって祭りでの演芸会をおこなっていた。神輿のカツギテは昔は満20歳の人で、徴兵検査の若者だった。これはこのあたりの慣習だと思う。どこでも満20歳だった。もちろん人手がたりなければ他の人も加わった。現在の神輿の担ぎ手は、担ぎ手を募集して日当を払ってやっている。募集というか、地区で誰かに頼んでいる。

小学校・銀行・役場に声をかけて頼んでいる。若い人が少ないので。

### 祭りの実施体制

自分が役員の際は、祭りの経費は役員が集めていた。当時は営林署の組合から、木を安く払い下げてもらい、それを販売して経費をつくった。それ以外には演芸会ときには寄付もあった。オハツホというご祝儀があった。漢字で書くと「御初穂」となる。十八成区というのが区会があった。今は行政区だが、前は違った。そこでの区長さんと役員さん達が祭りを取り仕切っていた。

### 祭りの当日とナオライ

神輿は町のなかを練り歩いたが、3、4か所ヤスミドコロをつくって、所々やすんだ。最終的には神輿を海に入れて、2時ぐらいにはナオライが始まった。今年は海の中がどうなっているのかわからない。何があるかわからないので入るのは禁止となった。

ナオライは祭りの後の慰労である。神様に「おわったよ」という報告の意味もある。ナオライではクジラがでていた。昔、この人といえどもクジラはそれほどたべられなかった。復興祭を昨年やったときに、クジラがでて、ボランティアのひとたちはクジラがでてきてびっくりした。ナオライでは刺し身と酒があれば十分だった。当時は酒を飲んで騒いだ。あの頃は飲まないとい損という意識がたかかった。酒ものむ機会があまりなかったから。だからナオライでは昔かならず誰か1人2人が暴れた。

### 今年の祭りについて

雨が降ったので縮小した。鮎川の復興祭と重なって人が来るかもしれないと警察は判断したらしく、当日は警察が神輿を道路側から海側にださないように警告があった。あの警告は言いすぎではないかと思った。今回のまつりで警備していたのは、警備会社のひと。昔は警察がやってくれた。交通指導隊（安全協会）がやってくれていたが、震災で解散してしまった。今回の警備の人は、鮎川の復興祭で雇った人を融通してこちらにもきてもらった。あの日は雨がひどかったので、祭りの実行は難しいとおもった。でも日をあらためて実施するのはさらに難しい。それでやることにした。最終的には当日の朝に、神社のなかで役員と神輿の担ぎ手の主だった人で決めた。中には反対の人もいた。

### いわき市四倉町との関係

（調査者が四倉出身という以下のお話をしてくれた）マグロ巻き網、二艘巻の方法でアグリ（網漁）というのがある。このうちアグリは四倉の漁師がここにもたらしたものである。網大工さんがここに来て、網の作り方を教えた。浜で網の修理を行い、午後になると出港し、いわしをあげるのは夜だった。夏のイワシ、カタクチイワシをとって、それがカツオの餌になった。バケツ一杯で5,000~8,000円ぐらいになった。いい商売だった。



写真3 十八成浜神明宮神社全景



写真4 十八成浜の住宅跡